ライチョウの生息域外保全に思うこと

小川潔　（東京学芸大学名誉教授・JWCS会長）

環境問題への認識拡大を背景に、絶滅の可能性がある野生動物の保全管理は組織的になってきたように感じる。日本産のトキが絶滅したとき、最後の数羽を捕獲してケージに入れ、人間の管理のもとで交配をさせようとし、高齢な個体で成功率を見込めないまま、絶滅に至ってしまった。作業を担当した当事者は懸命に絶滅阻止を目指したのだろうが、一般にはそういうことは情報提供されず。結果だけが知られるところとなった。これ以来、私は「生息域外保全」と今言われる方法に疑問を抱いてきた。どうせ絶滅するなら、生息地において自然な死を迎えることができるよう支援するのがよいのではないかと思ってきた。

見方が少し変わったのは、コウノトリの野生復帰に関わっている研究者から話をきいたときだった。兵庫県の豊岡はもともとコウノトリが飛来していた地域で、昔の鳥と人との距離を回復するという目標を掲げ、コウノトリも住める環境を取り戻すというスローガンのもと、ケージ内の交配で個体数を確保し、安全な農業を振興してえさ場を確保する、放鳥に当たっては、少しずつ試しながら、期待できない結果が出てくればもとに戻って対応を練り直すという「順応的」プロセスを繰り返すという方針を取った。結果的にこれが成功してというか、案ずるより産むが易しというか、放鳥された個体間に繁殖が行われ、今や全国的にコウノトリが飛来するようになった。

私が生まれ育って今も住んでいる地域にある都立恩賜上野動物園でライチョウの生息域外保全のため、野生から卵を取ってきてふ化させ個体数を増やすという話を聞いたとき、とても暗い気持ちになった。日本産トキの二の舞になりはせぬかという心配からである。報道からは、北欧のライチョウを飼育してその実績から日本のライチョウに進むというが、いったいどんな計画や見込みの下で行うのか、筋書きの全貌がみえなかった。

1970年代末に当時の朝倉繁春園長から、「これからの世界の動物園の使命は、絶滅に瀕した動物の保護と環境教育です」と聞いていた。この時代、上野の不忍池の一部で動物園内に編入されていた島で、関東唯一のコロニーとなったカワウの地域個体群の消滅を防いだのに、その後の動物園の動きは、カワウ生息地を片付けてハクチョウ放鳥を目指したこともあった。アイアイなどの展示場をつくるために、ゴイサギの休息地をつぶすこともした。地域の自然に対して無関心になっていったと感じざるを得ない。今度のライチョウについて、もちろん担当職員は一生懸命使命を果たしているのだが、結果として日本アルプスの生息地から採卵して国内数か所で分散させてふ化させようとした試みは、ヒナの生育段階で躓いてしまった。

しかし今回はトキの時代とは少し条件が変わってきた。まず、生育地で野生の個体が現存するという状況がある。文部科学省・農林水産省・環境省による「ライチョウ保護増殖事業計画」(H24) によれば、「本事業は、山岳ごとに本亜種の生息状況をより詳細に把握し、生息を圧迫する要因を明らかにすることにより、その軽減及び除去を行い、本亜種の生息に必要な環境の維持及び改善を図るとともに、野生個体数の急激な減少も想定して、飼育繁殖技術を確立し、繁殖個体の適切な方法による再導入等を検討すること等により、本亜種が自然状態で安定的に存続できる状態とすることを目標とする。」と謳い、飼育下での繁殖及び再導入等の検討という項目で、「健全な野生個体群が存在する今の段階から、飼育繁殖技術の確立及び飼育下における生態的知見の把握を行い、一定の個体数の維持を図ることを目的として、繁殖に必要な体制の整備等を行った上で飼育繁殖を実施する。」という手順が示されている。ただ、野生での生活・生態に基づいた飼育繁殖技術の確立という基本的手順は十分には意識されていなかったように感じる。

一方、生息地における個体数の確認や他の動物からの保護柵設置がボランティアの協力も得ながら組織的に行われ、専門の研究者が生息地における生態調査とヒナの個体数維持の実験を行ってきた。中村浩志さんと小林篤さんの共著「ライチョウを絶滅から守る！」には、乗鞍岳や北岳の標高3000m前後の生息地で、ヒナを天敵から守りながら個体数を維持しようとする試みが詳しく紹介されている。他の研究者一般にありがちな成功談ではなく、試行錯誤や失敗も率直に書かれていて、著者の謙虚さが伝わってくる。

この本の最後の部分が特に興味深い。野生のヒナは親鳥が一度だけ排出する大型の糞をついばむという。腸内フロラや免疫系が親からヒナへ継承されている可能性が示唆されている。ライチョウの生息域外保全でうまくいかなかった理由に関して、研究途上のためかこれ以上の主張はしていないが、野生での生活・生態を抜きにしては生息域外保全が成り立たないことを示す事例として重視すべきだろう。

私はライチョウの研究者ではないが、登山のたびにこの鳥の姿を求めてきたような気がする。1970年代には1月の南アルプス千枚岳稜線近くで、雪の上に出たダケカンバ疎林の枝の下にいる白いライチョウを見かけた。また毎年訪問してきた仙丈ケ岳でも幾度となくライチョウに会った。雪解けが進むのを追いかけて植物の芽が展開していくなかで、ヒナと親鳥が採餌している姿や、人が歩いていく山道で擬傷して気を引く親鳥も見てきた。2014年には、親鳥とヒナが採餌しているとき、突然頭上でホバリングして急降下してヒナを狙ったチョウゲンボウに、「ゴォ」という叫び声とともに飛び上がって体当たりした親鳥を目前で見たことがある。この時は、「いつも生きものをやさしく見て来たので、自然がほんとうの姿を見せてくれたのでしょう」と山仲間から言われてしまった。

ところで、2010年代のライチョウ生息数調査報告では、仙丈ケ岳を除いて各地のライチョウの個体数は減少しているという。なぜ仙丈ケ岳では減少していないのかについては分析がないようだが、仙丈ケ岳への入山者数は1980年の南アルプス林道開業以降、特に山頂直下の仙丈小屋が立て直されて収用能力が大幅に増した2000年以降、バスや山小屋が休業した1982-1985年および2019年（ともに台風被害による）、2020年（コロナ問題による）を除いて増加傾向にあるように見える。にもかかわらずライチョウの個体数が維持されているのは、1970年代から2016年までの体験からは、2000年に山小屋の管理人になって自然保護員もしたM氏によって登山道がロープで区切られ、営巣場所に人が近寄れなくなったことが大きく影響していると思わざるを得ない。それまで南アルプスはどこも自由に歩ける空間だったから、歩行路の限定には内心反発もあったのだが、これしか状況証拠に思いつくことはない。

一方で仙丈ケ岳でも2010年前後から、防護柵を超えていわゆる高山帯へのニホンジカやニホンザルの複数個体の進出を見かけるようになってきた。ライチョウにとっては、前者は餌の競合、後者は中村さんらの報告から捕食者としての脅威が知られている。もともとの競合・捕食者としてのカモシカ、オコジョも健在である。新参者の動物たちによる影響が、自然の選択圧としてライチョウの個体数との間でもともとに近い形で平衡状態になることを願うばかりである。

写真：ライチョウのヒナ

写真：カールに入ったニホンジカ

写真：稜線のニホンザル

中村浩志・小林篤（2018）ライチョウを絶滅から守る！　しなのき書房
文部科学省・農林水産省・環境省（2012）ライチョウ保護増殖事業計画（H24）